



今年度は認知症を予防するために「認知症についての知識」、「認知症の治療とケア」、「認知症の予防」について、順を追って掲載しています。



今月は、家族など身近な人が認知症になった場合の接し方について紹介します。

認知症が疑われるサインに気づいたら専門医（内科、神経内科、精神科）へ相談してください。

認知症の人との接し方



家族が認知症になったらどうすればいいの？

認知症の症状が進行しても、感情やその人らしさは残っています。介護者や認知症の人の気持ちに寄り添って、尊厳を保ち、不安や苦しみ、孤独感などを和らげる関わり方や環境づくりができれば、症状も軽減するといわれています。



おたっしや本舗

今月の福祉

多久市地域包括支援センター
(多久市役所 福祉課内)

☎ 75-6033

多久市地域包括支援センター（おたっしや本舗多久）は高齢者のみなさんが、いつまでも元気で安心して暮らせるように、あらゆる面から応援する総合相談機関です。

認知症ストップ作戦

No.10

「認知症サポーター養成講座」を受けて、認知症患者が住みなれた地域で生活できるよう、認知症の方やその家族を見守る『認知症サポーター』になりませんか？

ご希望の方は、福祉課へご連絡ください。

●「本人は何もわかっていない」は誤りです

認知症の人は「何もわかっていない」と介護者は思いがちですが、それは間違いです。物忘れが増えたり、今までできていたことができなくなったりする変化に、誰よりも本人が驚き、混乱しているのです。まず、その気持ちを思いやりましょう。

認知症の症状が進行して、言葉で自分の意思を表現できなくなってからも、年長者としての誇り、子どもや小動物、植物などを慈しむ気持ちなど、豊かな感情は保たれています。

こうした言葉にできない認知症の人の気持ちを介護者はおしはかり、それに寄り添う姿勢が大切です。「どうせ本人はわからないのだから」と、乱暴なものの言い方や態度、子ども扱いなどは、認知症の人の自尊心を傷つけ、感情が不安定になり、攻撃的な行動へのきっかけになることがあります。

介護者が重視したい
「認知症の人の気持ち」

本人がいちばん自分の変化に驚き混乱しているが、自尊心や豊かな感情は保たれていることを知ってほしい。

●「その人らしさ（個性）」を大切にしましょう

「認知症だからこうに違いない」などと接し方を決めつけるのは避けましょう。誰もがそうであるように、認知症の人にも、それぞれに「個性」や、長く生きて積み上げてきた「歴史」があります。「その人らしさ」を大切に接しましょう。

たとえ認知症になっても、「その人らしさ」は過去から現在へと確実につながっているのです。定型的な対応ではなく、認知症になる前のその人の姿も思い浮かべながら、「この人の場合は、今は何を望んでいるだろう」と言葉にできないメッセージをさぐるようにしましょう。

人は「自分らしさ」が尊重されていると感じられる環境であれば、安心して過ごすことができるものです。「認知症の人」としてではなく、「その人らしさ」を大切に接しましょう。

介護者が重視したい
「認知症の人の気持ち」

定型的な対応ではなく、本来の個性や、生きてきた歴史にもとづく「自分らしさ」を尊重されたい。